新型コロナ感染流行期における維持透析患者の在宅看取りの意義～『終末期の積極的メンタルケア』への取組み （続報）

医療法人衆和会　長崎腎病院　長崎腎クリニック

○藤原久子　林田めぐみ　中村麻衣子　井上大　大塚絵美子　河津多代　澤瀬健次　橋口純一郎　船越　哲

【はじめに】
重度の心不全等で透析の継続が不能となった場合、これまで当院では入院患者の看取り期として、家族と共に最期の時間を過ごすため病棟の個室を提供していた。しかし、新型コロナ感染流行期には面会禁止となり、看取りの場を提供できなくなった。これに対し、2021 年 9 月より『終末期の積極的メンタルケア』の考想のもと、透析患者の終末期ケアに精通している在宅医と連携し、在宅または当院敷設の特別養護老人ホーム（全個室）での看取りの情報提供を積極的に行った。
【結果】
当院での 2017 年以降の平均年間死亡者数は 58 人であり、うち在宅での看取りは年間 0-1 名であった。一方、2021 年 9 月から 1 年半の死亡者 115 名中、在宅で看取りを行った症例は 19 名に増加した。看取り体制から死亡までの平均期間は 4.2 日（1～10 日）、死亡場所は自宅が 12 名、特養が 7 名であった。特養での看取りに際しては居室に家族を入れたが、入室時の手指消毒や移動時の動線などにつき十分注意を払った。患者逝去後は家族の全員から、深い感謝の言葉を受けた。
【考察】
新型コロナ感染流行期で終末期においても面会制限となったが、この機会があったからこそ、『終末期の積極的メンタルケア』を実践できたと考える。